

〈死〉とともに生きる：死ぬとは?生きるとは?

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2016-07-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 竹之内, 裕文 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10297/9770

〈死〉とともに生きる

——死ぬとは？生きるとは？——

竹之内 裕文

はじめに

「そんなことは知っている」、「よく分かっている」と口にしながら、私たちは、日常生活の多くの事柄を素通りしています。よく分かっていることを、まるでよく分かっているかのように思い込んでいます。ここから抜け出す一歩は、「無知の知」、つまり自分がわかっていないということを知ることにあります。哲学的探究は、大切なことについて自分が無知であるという自覚とともに始まります。大抵の人たちが素通りしてしまうような問いの前に立ち止まるのです。今日は、この哲学的な態度を大切にしながら、生と死について考えていきましょう。そのアウトラインを冒頭に示しておくことにします。

「生きる」とは、どういうことなのでしょう。そのダイ

ナミズムを一語で言い当てようとするとき、どのような言葉が浮かぶでしょうか。「生きる」こと、それは「出会う」——多様なもの（者・物）やこと（事・言）と出会う——ということではないか、今のところ、私はそのように考えています。

「死ぬ」とは、どういうことでしょうか。私自身の死（第一人称の死）、大切な人の死（第二人称の死）、新聞やテレビで見聞するような、深いかかわりを持たない人の死（第三人称の死）など、当の「死」を支える関係性によっても変わるでしょうが、突きつめて言えば、「死ぬ」ということは、「別れる」ことを意味しているのではないのでしょうか。

「生きる」ことが「出会う」ことであり、「死ぬ」ことが「別れる」ことであるとすれば、「死とともに生きる」ということは、いつかは別れる、このままずっと一緒にいられない

ことを前提に出会うということの意味します。

ここまでのところは、「私が生きる」「私が死ぬ」というように、「私」を主体にした考察に終始しています。しかし考えてみれば、私たちは自分の意志で生まれようと思って生まれてきたわけではありません。気づいたら生きていたわけです。また誰も、年をとろうと思ってとったり、病気になるうと思ってなったりしません。死にたいと思って死ぬわけでもありません。つまり、生まれてきて生きていること、やがて老いて病気になるって死んでいくことは、いずれも人間がそれに対して受け身であるしかない——それを受けざるを得ない——事柄ということになります。「私」を主語として考察を進める限り、生老病死という現象に適正にアプローチすることができないのです。そこで講義の最後に、「いのち」に与るといふ視点から生と死の問題に迫ることにします。

↑なぜ「生」と「死」について問うのか？

しかし、そもそもどうして生と死について考えるのでしょうか。理由は二つあるように思います。ひとつには、生と死をどう観るか、つまり死生観が多種の基盤を与えるからです。たとえば慢性期・終末期において、私たちは

多くの選択を迫られます。それらの選択に土台を与えるもの、判断の根拠となるもの、それが死生観です。もうひとつには、問題の正体を突き止めるといふ理由があります。得体のしれないもの、正体不明なものは、私たちの不安を増幅させ、恐怖を煽ります。問題と正面から向き合うという意味で、私たちは生と死について問う必要があります。さらに詳しく見ていくことにしましょう。

↑選択の基盤としての死生観

私たちはしばしば、ある長さを持った線分として「人生」を表象し、そのうえで「いかに生きるか？」と思索します。しかしいかに生きるかは、その都度、いかなる選択をするかということの積み重ねです。Aにしようか、それともBにしようか、うまく選べるときはよいのですが、なかなか決められないこともあります。そのような場合、私たちは立ちどまり、そもそもなぜここでAとBを選ぼうとしているのか、Aを選ぶこと、Bを選ぶことには、どのような意味があるのだろうかと問います。そのようにして自分はいかに生きるのか」といふ問題に立ち返り、その理由・根拠を尋ねながら、そもそも「なぜ生きるのか」、「なんのために生きるのか」といふ問題に導かれることになります。

その結果、「そうか、自分はこういうふうに生きようとしているのだ」という確信を得て、「だったら今、選ぶべきものはこれだな」という具合に、「いかに生きるか」という問題から目の前の選択に戻ることもあるでしょう。結局のところ、いかに生きようとしているのか、自分でもよく分からないけれども、「とりあえずはAを選んでおこう」と、目の前の選択に戻ってくることもあるでしょう。いずれにせよ、「なにを選ぶか」という当面の課題について吟味し始めると、限りある生を「いかに生きるのか」という問題を無視できなくなります。さらに「いかに生きるのか」について包括的に考えようとすると、いずれ訪れる「死」をどのように受けとめるのか、「生」と「死」をどう関係づけるのか、問わざるを得ません。

一例として、緩和医療学会の「苦痛緩和のための鎮静に関するガイドライン」(二〇一〇年版)を紹介しましょう。ガイドラインの中に、次のような言葉が登場します——「苦痛が耐え難いときにどのような治療を希望するかは、何を望ましい死にとって重要であると考えるかが関与しているため、患者個々によって希望は異なると考えられる」。慢性期・終末期疾患を抱えながら、どこまで痛みに耐えるべきなのか、どの段階から、どのような治療を開始すべきなの

か、その選択は「患者個々の「希望」に応じて異なると、ガイドラインは指摘するのです。どのような生と死を望ましいと考えるか、それはまさしく死生観の問題です。医療的な選択が死生観によって支えられる。死生観が異なるとしたら、医療的な選択も違ったものになる可能性があるわけです。

別の例を、アメリカの精神科医、ハーバート・ヘンディングの著書『操られる死〈安楽死〉がもたらすもの』、時事通信社、二〇〇〇年)から挙げておきましょう。同書の問題は延命治療と安楽死です。延命治療は、死が到来しないようにこれを先延ばしにしようと試みる。これに対して安楽死は、今この瞬間に、死を到来させる試みです。この点では、延命治療と安楽死は正反対のものです。しかしヘンディングは、「死を受け入れることができない」、「私たちのコントロールが完全に及ばない生の事実として、死を認めることができない」という両者の共通点を指摘するのです。老いとともに、病を得て、私たちは、かつて簡単にできていたことをできなくなります。やがて死にゆく(dying)プロセスを歩むことになります。それを受けとめることができないうために投下される無意味な医療テクノロジー、それが延命治療にほかなりません。延命治療の場合、まだまだ

と言って、先延ばしにするかたちで、死にゆくプロセスが遠ざけられます。安楽死の場合は、プロセスの先にある「死」を一挙に到来させるかたちで、死にゆくプロセスが回避されます。

†問題の正体を突きとめる

以上のように、生と死をどう捉えるかという死生観の問題は、医療的な選択の基盤として、重要な意味をもっています。にもかかわらず私たちは、なかなか死について正面から考えようとしません。なぜなのでしょう。それは死について考えることが耐えがたいからです。私だって四六時中、死について考えているわけではありません。それは私にとっても耐えがたいことです。

神谷美恵子さんという精神科医は、『生きがいについて』という素晴らしい本の中で、「私たちの生きがいは損なわれやすく、奪い去られやすい。人間の生存の根底そのものに、生きがいを脅かすものがまわりついているためであろう」と書きとめています。人間の生存の根底に潜んでいて、生きがいを脅かすもの、それが死、病氣、老いです。病氣、老いを免れないという意味で、すべての人間はひとしく死刑囚と同じ身分にあると言ってよいかもしれません。私た

ちの生は、いつ損なわれても、いつ途絶えてもおかしくないので、いからず。

それがいつなのかは分かりませんが、必ずいつか死がやってくるということを、私たちは知っています。ただ、いつ死ぬか分からないからといって、たとえば今日の講座が終わって家に辿り着くまでに自分が死んでいるかもしれないと、真剣に考え始めたなら大変なことになります。死の切迫は、平穩な日常の暮らしを土台から覆ってしまうので、私たちはいろいろな事で気を紛らわせて、その究極の可能性と向き合わないようにしているのです。「人間は必ずいつか死ぬ」(大前提)、「Xは人間である」(小前提)、したがって「Xはいつか必ず死ぬ」(結論)という三段論法を頭では分かっているのです。しかし、そのXのところに次に代入されるのが、自分にとってかけがえのない者——自分自身や自分の家族——であるとは想定していません。それはどこかの知らない人だろうと、勝手に思い込んでいるのです。神谷さんが洞察する通り、それでも思い込まないと、「人間の精神は日々ゆさぶられて耐えられないから」でしょう。

とはいえ、いつまでも気を紛らわせて、「死」から逃走し続けることはできないでしょう。とりわけ家族や友人など大切な人の死は、「自分がいつか必ず死ぬ」という究極の可

能性を突きつけるはずです。ここで立ちどまって、考えてみましょう。はたして死というものは、生涯に亘って逃走を続けなければならないほど、恐ろしいものなのでしょうか。

『ゲド戦記』において、大賢人ゲドが弟子のアレンに語るように、私たちは「なが生で、なが死か、まずそのところかわかっていない。わかってもいいものを意のままに動かそうとするなどというのは、賢い人間のすることじゃないし、たとえしたとしても、いい結果など期待できるはずがない」というのが真相ではないでしょうか。

自らが設計して、創りだしたものであれば、あるいは完全にコントロールすることが可能かもしれません。しかし私たちは、生と死を身に享けるほかない。この受け身の要素が残される限り、生と死について完全に理解することはできないでしょう。しかし部分的であれ、暫定的であれ、何らかの理解を手に入れておかないと、何の手出しもできません。

大賢人ゲドは続けて、弟子のアレンに語ります——「あなたはいつか死ぬ。いつまでも生き続けるなどということはない。だれだって、何だって、そうだ。永久に生き続けるものなど、ありはしないのだ。ただ、わしらは幸いなこ

とに、自分たちがいつか必ず死ぬということを知っておる。これは人間が天から授かったすばらしい贈り物だ。ひとり人間としてこの世にあるという」。

ここでゲドは、二つのことを指摘しています。ひとつには、人間は自分がいつか必ず死ぬということを知っているという事実です。これは人間の高度な言語能力によって支えられているようです。たとえば「ここに餌があるぞ」という情報を伝達する信号音ならば、イルカやクジラも使用しています。しかし、地球の裏側の見たこともない事物、紀元前の歴史的人物・事物となるとどうでしょう。人間は、未知なもの、未経験なもの、抽象的なものを表す言語能力に恵まれて、自分たちがいつか死ぬという経験不可能な可能性について語ることができるのです。その意味で「自分がいつか死ぬ」というのは、さしあたり人間だけが備えている理解ということになりそうです。

もうひとつには、自分が必ず死ぬと知っていることは「贈り物」だということです。皆さんは、それを贈り物と思えるでしょうか。今日の講義が終わるまでに、私たちがそれを「贈り物」として受けとることができるようになっていたら、と願っています。私たちには「天から授かったすばらしい贈り物」が均しく与えられています。それを活かす

て、一人ひとりがそれぞれの生と死の理解を手に入れていく、今日の講義がその素材を提供できることを願っています。

★生と死を探求するガイドマップ

- 一 生きるということ
- 二 死ぬということ
- 三 死とともに生きる
- 四 いのちが披く地平

右のような手順で、生と死の探究を進めていきましよう。その旅路の道連れにしたい詩があります。長田弘という詩人の詩集『死者の贈り物』に収められている「イツカ、向コウデ」という詩です。

人生は長いと、ずっと思っていた。

間違っていた。おどろくほど短かった。

きみは、そのことに気づいていたか？

なせばなると、ずっと思っていた。

間違っていた。なすとげたものなんかはない。

きみは、そのことに気づいていたか？

わかってくれるはずだと、思っていた。

間違っていた。誰も何もわかってくれない。

きみは、そのことに気づいていたか？

ほんとうは、新しい定義が必要だったのだ。

生きること、楽しむこと、そして歳をとることの。

きみは、そのことに気づいていたか？

まっすぐに生きるべきだと、思っていた。

間違っていた。ひとは曲がった木のように生きる。

きみは、そのことに気づいていたか？

サヨナラ、友ヨ、イツカ、向コウデ会オウ。

この講座には六十代の受講者が多いと聞いています。私より二十歳ぐらい年上の方々ですから、ここで語りだされているようなことには、とうに気づいておられるのかもしれない。私の場合は、最近ようやく気づき始めています。二十代、三十代の頃とは、いろいろなことが大きく変わった。

てきている。にもかかわらず、その違和感、驚き、感触にふさわしい言葉が見つからず、不分明な思いばかりが積み重なって鬱積^{うっせき}していく。そのような時にこの詩人の言葉と出会いました。そして教えられたのです。十代、二十代、三十代、四十代、五十代、六十代、七十代、そして八十代、その節目、節目に、私たちは生きること、老いること、病になること、そして死ぬことについての定義を獲得していく必要がある。小さくなった服にしがみつき、窮屈した思いを抱えながら、それを着用し続けるのではなく、むしろ古くなった服を手放し、現在の自分にフィットした新しい服で身を包んで生きていく。それとともに生きること、死にゆくことが充実し、深みを増すのではないか。そのような希望を抱きながら、「生きること」と「死ぬこと」の新しい定義を、皆さんとともに手に入れたいと思います。

一 生きるということ

✦生命であることについて

生きるということは、生命であるということを前提にしているように思います。ならば物質であることと生命であることの違いは、どこにあるのでしょうか。物質 (material)

が絶え間ない結合と離散を繰り返すのに対して、有機体 (organism) には個体としての統合 (integrity) が見られます。統合に伴って〈内部〉と〈外部〉の境界が設けられ、有機体としてのアイデンティティが確立されます。それと同時に、〈内部〉に空気や栄養を取り込み、〈外部〉に不要物を排出する代謝活動 (metabolism) が不可欠になります。

有機体ないし生命体であるためには、代謝を営まなければなりません。代謝を通じた外界との関わり、物質の交換が不可欠です。代謝に支障が生じると、生命活動はやがて停止します。個体としての統合が崩れ、アイデンティティを失い、物質に戻っていきます。私たちはそれを「死」と呼んでいます。つまり、生命であるということは、代謝という活動とそれが停止した状態としての「死」を、自らのうちに必然的に含んでいるということです。物質は結合と離散を繰り返すだけで、死ぬことはない、生命であるからこそ、死ぬことができるのです。

✦生きることの多義性

「生きる」という営みに関して、日本語には「生命」のほかにも、「生活」「人生」「生涯」「いのち」などたくさん表現があります。それらは一つひとつ、用例とニュアンス

を異にします。その差異に応じて、それぞれの角度から、「生きる」という同一の現象を照らし出しています。それを手がかりに、「生きる」ことの豊かさや全体を視野に収めておきましょう。

「生活上」、「豊かな生活」、「生活環境」といった言い回しに示されるように、「生活」という語には、どこか社会的、文化的な要素が入り込んでいます。つまり、ただ生命を保存するだけでなく、衣食住を確保するにしても、より社会的、文化的にレベルの高いものになりたいというニュアンスです。「人生」という言葉からは、人として生きる、その喜怒哀楽が感じられます。「生涯」は、涯はたという言葉に示される通り、生きるという営みが果てしなく続くのではなく、いつか終焉を迎える、有限であるということを教えてくれます。

まとめておきましょう。「生命」は、あらゆる生きものに共通する現象を指す言葉として、科学をはじめ、いろいろな領域で使われます。それに対して「生活」という言葉には、より人間的に充実した方向へという願いのようなものが託されている。「人生」になると、人間に固有な生の追求とそれに伴う喜怒哀楽が前面に出てきます。「生涯」は、終わりから生を捉える視点を含んでいます。その視点は「いのち」という言葉において、より鮮明になります。生と死が表裏

一体であること、死を介して生と生がつながっていることがより明確になります。「いのち」という言葉は、生命の高まりがいったん断ち切られたところで開かれる次元を指し示しているからです。

年たけて又こゆべしと思いきやいのちなりけり

小夜の中山

ご存知の通り、西行は、北面の武士として活躍しましたが、やがて出家し、みちのくに旅に出ます。晩年になってもう一度、京を出て、みちのくに向かう途次、掛川にある小夜の中山に差し掛かります。そのとき西行は右の歌を詠むのです。「いのち」という言葉について考察するとき、この歌はとても示唆に富んでいます。文献的な裏づけが十分ではないのですが、西行はこの歌を通して、小夜の中山に語りかけているように思います。

年を取って、またお前を越える日が来るなんて、
思ってもみなかったよ。いのちだなあ、小夜の中山。

ここで、三つのことが注目されます。第一に、「思いきや」

(思いもしなかった)という詠嘆です。西行にとって小夜の中山との再会は、彼自身の思惑・計らいを超えた出来事でした。自分の思惑や計算、つまりコントロールを超えて、「生きる」という営みに触れたとき、西行は「いのち」と口にしたわけです。第二に、「晩年」という時期です。西行はすでに、自分に迫りつつある「死」を明確に意識しています。「もうお前(小夜の中山)を越える日は来ないだろう」、「これが最後になるだろう」という歌人の覚悟が「いのち」という言葉に結実しています。第三に、生と生のつながりです。「いのちなりけり」という言葉には、小夜の中山との出会い(再会)の不思議が込められています。自らの生の歩みを、他なるもの(小夜の中山)とのかかわりから捉えようとするとき、西行にとってもっともふさわしい言葉が、「いのち」だったわけです。ここで「いのち」という言葉は、個体的な生や人間の生に限定されない広がりの中で、語り出されています。

★生きること、出会うこと

「生きる」ということは「出会う」ということに尽きる、西行の歌はその例証となるのではないでしょうか。実際、自分でないものとかかわり(関係)を離れて、自分が誰

かであるか、何者であるか、語ることができるとでしょうか。もしできないとしたら、自分というものは、他なるもの(者・物)との出会いによって成立していることとなります。

マルティン・ブーバーというドイツの哲学者は、「わたしはあなたのうちで生成する。〔そのように〕生成しながら、わたしは「あなた」と呼びかける。／現実的に生きること、すべて出会うことである」(『我と汝』、岩波文庫)と述べています。常識的なものの方からすれば、「わたし」は、「あなた」から独立に、はじめから存在していて、そのうえで出会うということになるでしょう。これに反してブーバーは、「あなた」があつて初めて「わたし」がある、「あなた」との出会いがなければ「わたし」はないと主張するのです。ブーバーと同じような趣旨のことを、ミルトン・メイヤロフという哲学者が語っています。メイヤロフの言葉の方向がわかりやすいかもしれません。

相手をケアすることにおいて、その成長に対して援助することにおいて、私は自己を実現する結果になる。

作家は自分の構想をケアすることにおいて成長し、教師は学生をケアすることによって成長し、親は子をケアすることによって成長する。(略)他者が成長してい

くために私を必要とするというだけでなく、私も自身自身であるためには、ケアの対象である他者を必要としているのである。（『ケアの本質』、ゆみる出版）

「自分自身であるためには、ケアの対象である他者を必要としている」という指摘は、「あなた」との出会いがあつて初めて「わたし」が存在するというブーバーの洞察と響き合います。私が私であるために、ケアする相手、「あなた」を必要とする。禅問答のように難解に聞こえるかもしれませんが、私たちはこのようなことを日常的に経験しています。

たとえば母親は、はじめから母親なのではなく、子を育てることで母親になっていくとよくいわれます。こういう状況では子どもはこんなふうに泣くと気づき、子ども（ケアの対象である他者）をケアするということを学んで、母親になっていくのです。母親を「母親」に育てるのは、母親がケアしている相手、つまり子どもであつて、その子どもがいなければ「母親」であることはできないのです。この一例からも、あなたがあつて私があるということの意味が垣間見えるのではないのでしょうか。

ここで、生命であるということに立ち返れば、これを支

える代謝の営みは、自分の〈外部〉、自分にとって他なるものとかかわり合うことにほかなりません。自分ではないもの、すなわち他なるものとかかわりがなければ、自分であることができないのです。そう考えてみると、「生命」の生物学的な基礎から、「いのち」の交感まで、生きるということとは、他なるものとの関係を離れて成立しない、そう言うてよいのではないのでしょうか。

†どうして生きてきたのですか？

小学校高学年の頃だったと思います。「なぜ生きるのか」と、思い切つて父に尋ねたことがあります。「当時四〇代だった父は、しばらく黙つて考えてから、「それを知るために生きる」と答えてくれました。しかし父の回答は、私の問いを先送りしているような気がしました。「それを知る」日は、いったいいつ訪れるのでしょうか。その日が来るまで、私は確かな根拠・理由を欠いたまま、生きることになりました。そもそもその日は、本当にやつて来るのでしょうか。もしその日が訪れないならば、生きることそのものが無意味になつてしまいます。現在の私の言葉でいえば、私は自分自身の存在根拠を知らないという事実を驚いたのです。

私が十代後半になると、精神疾患を抱えていた父は、生

きる気力を喪失していききました。そして私が大学生になった秋、父はすい臓がんの再発のために死去しました。今や私も、当時の父の年齢に達し、気づいたことがあります。「なぜ生きるのか」という問いに託して、私が父から聞き取ったこと、それはたんなる父の人生の履歴や体験談——「いかに生きるか」——でもなく、父自身の生き方を離れた一般的考察——「なぜ生きるか」——でもなかったということです。大江健三郎さんの次の一節を目にしたとき、ようやくそのことが分かったのです。

——どうして生きてきたのですか？

普通の使い方、どうしてという言葉には、「どのような方法で」と「なぜ」と、二つの意味がありますよね。(略)ところが、わたしには二つを一緒に聞きたいという気持ちがあり、その人はうまく二つを一緒にして、答えてくれるのじゃないか、とも思っていたのです。

(大江健三郎『自分の木』の下で、朝日文庫)

「なぜ生きるのか」と質問したとき、小学校高学年の私は、「人はなぜ生きるのか」の一般解を求めていたように思います。「いかに生きる」と無関係に、「なぜ生きる」の解が得

られると前提していたわけです。それに対して父は、「それを知るために生きる」と答えました。「私はいかに生きる」、「あなたはいかに生きる」と、主語を補ってみると明らかになるように、「いかに生きるか」は個別的な生の課題です。つまり父の回答とともに、問題は「人はなぜ生きるのか」から、「わたしはいかに生きるのか」に転換されたわけです。

そう考えてみると、勇気を奮って父に問いをぶつけたとき、私は、父がどういうことを大切にしながら、何を選択して生きてきたのか、どんな問題に直面して、「生きる」という課題をどのように受けとめて、現在の父になったのか、ということに関心を寄せていたのです。「生きる」という途方もない課題を前にして、息子は、父が「どうして生きてきたのか」、それを聞いてみたかったのです。父と死別した後も、「あなたはどのように生きてきたのですか？」という問いを携えながら、私は多くの人たちと出会ってきました。

ご高齢の方々にとっては、介護をする／されるということが切実な問題かと思えます。そのような場面でも、「あなたはどのように生きてきたのですか？」という問いを携えていると、介護する／されるという関係が大きく変わるように思えます。

六車由実さんという文化人類学者がいます。彼女は村を

訪ねて、古老に聞き取りをしていたのですが、数年前から介護士として働くようになり、『驚きの介護民俗学』（医学書院）という本を出版されました。六車さんは、学者として生き続けていくことに魅力を感じなくなり、自分はこれからどうやって生きていこうかと悩んでいたといいます。

暗い霧の中でさまよっていた私はというと……。まだ迷いや不安が完全に払しょくできたわけではない。それでも、老人ホームでそれぞれの女性の生き方に深いところまで触れる機会を得ることで、誰かの真似ではなく、自分は自分の人生をまっすぐに歩いていってよいのかもしれない、と思えるようになってきた。

六車さんは介護士として、入居者の老人たちを世話・介護することを通して、排泄の流儀、食べ方、徘徊など、多くの〈奇怪な〉行動や〈問題行動〉に直面します。介護職としては困ったものです。「理解できない、問題だ、やめてほしいな」と思うでしょう。六車さんにもそういう思いがなかったわけではないでしょう。しかし彼女は「あなたは どうして生きてきたのですか？」という問いを携えて、老人たちと向き合います。それによって彼女は老人たちの人

生の歩みやそれととり巻く社会の変遷を知り、老人たちと出会い直していきます。「生きる」という課題について、当事者から学ぶという実践を通して、六車さんは自分の歩むべき道を見出していくのです。

同じ観点から、エリザベス・キューブラー・ロスの『死ぬ瞬間（On Death and dying）』もとり挙げておきましょう。同書については近年、様々な批判が提起されていて、その中にはもつとも思われるものもあります。それでも彼女が偉大なパイオニアであるという事実は揺らぎません。キューブラー・ロスは一九七〇年代前半という時代に、終末期がん患者をストレッチャーで医学部の大講堂まで乗せて運び、学生や同僚の前でインタビューしたのです——「あなたにとって辛いことは何ですか。今、悔しい思いをしていることはありますか」と。そのような公的な場で、患者が臆したり、黙り込んだりせず、自分の思いを表明できるように、彼女は、患者との人間関係を築くところから始めました。先生役として自らの思いを訴えるという経験を通して、患者は、生きる勇氣と自信を得ていきました。

私にとつては、これが死生学の原点です。現在の死生学は、この点ではキューブラー・ロスの域に達してないと思います。本講座にしても、私のような者が皆さんの前で話すの

ではなく、終末期患者やがんサバイバーの方々に講義の機会を提供できれば素晴らしいと思います。

キューブラー・ロスは、なぜこのような講義を実現することができたのでしょうか。それは出会った患者一人ひとりに対して、彼女が「あなたはどのように生きてきたのですか？」という問いを携えていたからだと思うのです。現に『死ぬ瞬間』のはしがきには、次のように記されています。

この本はたんに、患者を一人の人間として見直し、彼らを会話へと誘い、病院という患者管理の長所と欠点を彼らから学ぶという、刺激にみちた新奇な経験の記録に過ぎない。人生の最終段階とそれにもなう不安・恐怖・希望についてもっと多くのことを学ぶため、私たちは患者に教師になつてほしいと頼んだ。私はただ、悩みや期待や不満を語ってくれた患者たちのことを語るだけだ。

二 死ぬということ

子どもの洞察に学ぶ

ここまで「生きるということ」について考えてきました。

ここからは「死ぬということ」について探究していきます。その糸口を子どもの理解に求めることにしましょう。子どもはどのように死を理解しているのでしょうか。ある教育学者の文章から見ていきましょう。

子どもには死がわかるのか。わかるとすれば、どの程度なのか。大人の理解とは、どう違うのか。

たとえば、幼稚園の子どもにとつて、死は「もう会えなくなる」ことと同じだという。そこで〈遠方に引越してもう会えない〉のと、〈死んでしまってもう会えない〉との違いが、よく理解できないという。

そんな話を聞くと、私たちは、かわいいものだと思ふのだが、では、その違いをどうやって言葉で説明できるのか。親の転勤に連れられて、もう帰ってくる可能性のない大の仲よしの「ナオちゃん」を見送りながら、また会えるの、帰ってこないの。その質問にどう応えるか。

引越してもまだ生きてるけど、死んだらもう生きていない。それで、なにかを説明したことになるのだろうか。（西平直「デス・エデュケーションとは何か——大人が・子どもに・死を・教える」、『死生学』入門』

さあ、皆さんも考えてみてください。〈遠方に引越してもう会えない〉と〈死んでしまってもう会えない〉は、どう違うのでしょうか。この区別が意外と難しいのです。小さな子どもだから分らないというような話ではないのです。同じ引越しても、たとえば静岡市から藤枝市に引越すのと、アラスカに引越すのでは、かなり違うでしょう。藤枝市に引越す場合だと、また会いたくなったら、すぐに会えそうです。やはり問題になるのは、相当の遠方に引越してもう会えないという場合でしょう。

私が大学時代に親しくしていた友人の一人は、かなり無鉄砲な男で、ある日「俺はアメリカに出かけてくるぜ！」と言い残して、旅立ってしまいました。それ以来ずっと音信不通で、消息が掴みません。彼がまだ生きていて、アラスカか日本のどこかの街に住んでいるのか、それとも無鉄砲さゆえに、なにかの事件に巻き込まれて亡くなってしまったのか、まったく分からないのです。この友人の事例は、〈遠方に引越してもう会えない〉と〈死んでしまってもう会えない〉の区別が簡単ではないことを示しています。

遠い異国の地に引越してしまい、やがて音信不通にな

り、消息が掴めなくなる。そのような場合、〈遠方に引越してもう会えない〉ことは、〈死んでしまってもう会えない〉からどう区別されるのでしょうか。〈遠方に引越して〉であろうが、〈死んでしまつて〉であろうが、〈もう会えない〉ということには変わりはありません。いずれの場合でも、大切な人に〈もう会えない〉ということがもつとも切実な問題ではないでしょうか。

〈遠方に引越してもう会えない〉と〈死んでしまつてもう会えない〉の違いをよく理解できないのは、むしろ子どもが〈もう会えない〉という死別の本質を鋭く捉えているからではないでしょうか。〈もう会えない〉原因が引越しているからと、死亡にあると、それは本質的な問題ではない、だから〈遠方に引越してもう会えない〉と〈死んでしまつてもう会えない〉の違いをよく理解できないのではないのでしょうか。

＋死と向き合つ

岸本英夫さんという宗教学者も、死別の本質を〈もう会えない〉このうちに見ています。岸本さんは、米国留学中に黒色腫に罹患し、何度も手術を受けます。辛い闘病生活を送るなかで、切迫する「死」をどう受けとめたらよい

かという問題の前に立たされます。

このような状況におかれて、私には、死というものを、どう考えたらよいかという問題が深刻になってきた。それをはつきりさせなければ、一刻も心を休んでいられないような問題なのである。(岸本英夫『死を見つめる心 ガンとたたかった十年間』、講談社文庫)

岸本さんの苦闘は次の言葉に実ります。

死というものは、人間にとって、大きな、全体的な「別れ」なのではないか。そう考えたときに、私ははじめて、死に対する考えかたがわかったような気がした。(略)ふつうの別れのときには、人間はいろいろと準備をする。心の準備をしているから、別れの悲しみに耐えてゆかれる。もつと本格的な別れである死の場合に、かえて人間は、あまり準備をしていないのではないか。それはなるべく死なない者のように考えようとするからである。(略)では、思いきって準備したらどうだろうか。(同書)

友達が引越す、同僚が転勤する、退社するといった日常的な別れに際して、私たちは感謝の思いを伝える、プレゼントやメッセージを贈る、出合いを振り返るなど、さまざまな準備をします。準備をしているから、つらい別れにもなんとか耐えることができます。これに反して、死という「全体的な別れ」、「本格的な別れ」に際して、私たちはむしろ準備を怠っているようです。それはどうしてなのでしょう。神谷美恵子さんが指摘するように、死という究極の可能性は人間の精神を根本から動揺させる、それに応じて私たちは、「なるべく死なないもののように」自分を理解するからです。

では、思いきって準備してみたらどうだろうと、岸本さんは提案します。日常的な別れのために、細やかに準備して備えるように、死についても、「全体的な別れ」にふさわしい仕方では準備をしてはどうだろうというのです。いざ準備をしてみると、どうなるでしょうか。死から生を切り離して生きるのではなく、死とともに生きる方向に踏み出すことが可能になります。

そのためには、今の生活は、また明日も明後日でもきるのだと考えずに、楽しんで芝居を見るときも、暮を

打つときも、研究をするときも、仕事をするときも、ことによると今が最後かもしれないという心がまえを始終持つているようにすることである。そしてそれが段々積み重ねられてくると、心に準備ができてくるはずである。その心の準備が十分できれば、死がやってきても、ぶつつりと、執着なく切れてゆくことができるのではないか。(同書)

宗教学者だけのことはあって、ここで岸本さんは、哲学・宗教思想の一つの伝統を受け継いでいるように映ります。例えば、ローマ帝国の哲人皇帝として知られたマルクス・アウレリウス・アントニヌスは、あたかもすでに死んだ人間であるかのように、現在の瞬間が生涯の終局であるかのように生きよ、という格言を残しています(『自省録』岩波文庫)。デンマークの哲学者、キェルケゴールも、これと同じ趣旨の言葉を書き残しています。

生のあらゆる可能性を不可能にしてしまうという意味で、生にとって死は「究極の可能性」であるといつてよいでしょう。その「究極の可能性」を無視したり、排除したりしないで、「可能性」として、つまりいつか現実化するものとして受けとめて、これを視野に入れて生きるということなのです。

『ゲド戦記』の第一巻(影との戦い)では、死の影から逃げ惑う若きゲドの姿が描き出されます。自分の分身である影、生を脅かす死に追い駆けられて、ゲドは恐怖のあまり、地の果てまで逃げていきます。しかし、ついにゲドは逃げるのをやめて、影に立ち向かっていきます。それに立ち会う友人の眼には、ゲドが自分の影、つまり死と一体になったように映ります。この時から、ゲドは死から逃れて、死と離れて生きるのではなく、死とともに生きるようになります。「死して生きる」という態度を身につけ、大賢人への道を歩んでいきます。

死は、生を照らし出す光源です。死という究極の可能性のもと、現在の瞬間がかけがえのないものとして輝き出るのは、究極の可能性を視野に入れながら、今、ここで、自分がすべきこと、本当にしたいことを選び取る、そのようにして眼の前の可能性を現実化していく。それとともに人は、一日一日を丁寧な、一つ一つの事柄を大切に生きていくようになるでしょう。

神谷美恵子さんとともに、これを否定(死)の上に立つ肯定(生)と呼んでもよいかもしれません。離島に隔離されたハンセン氏病の方々との出会いを通して、彼女が学んだように、深刻な否定の上に立つ肯定というのは、生を愛

おしむ態度を培うのです。それは一朝一夕に身につくようなものではないでしょう。多くの病者・障害者は、文字通りに「深刻な否定」を身に受け、その暗闇のなかで、光と出会うのでしょうか。

†死すべきものの希望

いずれにしても、一日一日を丁寧に生きる、眼の前の課題一つひとつを大切にして生きることには徹するならば、死はもはや問題ではありません。問題はむしろ、その都度、その都度の瞬間をいかに生きるかです。次の瞬間に生がやってくるのか、それとも何もやってこないのか、そんなことにかかわりなく私は、今、ここに生きる。ただ生きるだけです。

多くの終末期病者は、次の瞬間にまた生が到来するのかわからないのか、ということとを全身で受けとめ、一日一日を丁寧に生きています。「ひと月後に自分は生きていますのか」「一週間後はどうか」「そして明日は……」と自問しながら、孫の結婚式の予定やそこまで近づいている正月のことを考えるのです。しかし、それは終末期病者に限ったことではありません。次の瞬間、はたして生が到来するかどうか、その保証は誰にもありません。だとしたら新たな刹那、ま

た生が到来し、私たちがなお生きるということ、それは「奇跡」と言ってもよいと思います。「全体的な別れ」、「究極の可能性」としての死を免れない限り、今、ここに、他のものとともに存在するということが、それは私たちが望みうる最大の恵みではないでしょうか。「死すべきもの」——死ななければならぬもの、死ぬことができるもの——であるからこそ、生きる喜びがあるのであり、今日一日を真剣に生かせることができるのです。

三 死とともに生きる

†喪失とともに生きるという課題

私はもうすぐ四十八歳になります。そう言うと、人生の先輩方から、「まだまだ若いよ」、「元気の盛りさ」という声が聞こえてくるようですが、自分なりにいろいろな喪失を味わっています。私は十九歳のときに父を亡くしました。またこの数年で、大切な者たちとの別れを次々に経験しています。哲学の恩師、看取りの現場に私を誘ってくれた敬愛する在宅緩和ケア医、人生の師匠とも呼ぶべき筋ジストロフィー症の友人を亡くしました。みんな先に逝ってしまいました。この方たちは誰をとつても、しばらく会わなかつ

たとしても、会えばすぐに、何の前置きや用意なしに、すつと本題に入り、大事な話ができる相手だったのです。そういう人たちに限って、死別しなければならぬというのは、どうということなのでしょう。世界に深く大きな穴が開いてしまった、欠損・空白が生じてしまったような感覚とともに生きています。

「生き方の幅」もだいたいぶ狭まってきた感じがします。アマルティア・センというノーベル経済学賞を受賞したインドの経済学者が、「ケイパビリティ (capability)」という概念を提起しています。ケイパビリティというのは、端的に言えば「あなたが何をできるか、何になれるか (What you can do, what you can be)」の組み合わせのことです。

それでもまだ分かりづらいですよ。そこで川本隆史さんという哲学者が「生き方の幅」という解釈を提示したのです。一年後、二年後、そして十年後に、私が何をできるか、何になれるか、その可能性は確実に縮小してきています。大学教員であることに魅力を感じなくなったからといって、今から国連職員になるというのも難しいものがあります。おもしろいもので、「生き方の幅」が狭まると、逆に、かつて現実化できなかった可能性がクローズアップされます。とはいえ自由度が小さくなった分だけ、腹を決めないとい

けない時期に来ているのかもしれないとも思うようになりました。身体的な衰え、老いの問題もあります。いずれにしても、喪失とともに生きなければいけないということが、だんだんリアリティをもって感じられるようになってきました。今日の主題である死別も、喪失のひとつと言ってよいでしょう。

人生は悲哀と喪失に満ちており、それとともに私たちは「どのように生きるか」という問いを投げかけられている。そんなことを考えながら、死んでしまった大切な人たちの思いながら酒を飲むとき、長田弘さんの詩が思い起こされます。

こんな静かな夜

先刻までいた。今はいない。

ひとの一生はただそれだけだと思う。

ここにいた。もうここにはいない。

死とはもうここにはいないということである。

あなたが誰だったか、わたしたちは

思いだそうともせず、あなたのことを

いつか忘れていくだろう。ほんとうだ。

悲しみは、忘れることができる。

あなたが誰だったにせよ、あなたが生きたのは、ぎこちない人生だった。

わたしたちとおなじだ。どう笑えばいいか、どう怒ればいいか、あなたはわからなかった。

胸を突く不確かさ、あいまいさのほかに、いったい確実なものなど、あるのだろうか？

いつのときもあなたを苦しめていたのは、何かが欠けているという意識だった。

わたしたちが社会とよんでいるものが、もし、価値の存在しない深淵にすぎないなら、

みずから慎むくらいしか、わたしたちはできない。わたしたちは、何をすべきか、でなく

何をすべきでないか、考えるべきである。冷たい焼酎を手に、ビル・エヴァンスの

「Conversation with Myself」を聴いている。

秋、静かな夜が過ぎてゆく。あなたは、ここにいた。もうここにはいない。

ある日、その講座の教授に相談を持ちかけたところ、「やる

かやらないか迷ったら、やめておきなさい」と言われました。それを聞いて驚きました。私はそれまで、「迷ったらやれ」という助言しか聞いたことがなかったからです。ふり返って考えてみると、この教授は、世界に無暗に手を出すことの怖さを知っていたのではないかと思うのです。長田弘さんの先ほどの詩「イツカ、向コウデ」もそうですが、歳を

重ねるとともに、世界が単純にできていないということが見えてきて、ここで、自分が手を出すことの意味を考えてしまうのではないのでしょうか。購入したビル・エヴァンス

のアルバムを聴き、この詩を読みながら、そんなことを考えることがあります。

↑人生の悲哀とともに立ち上がる思索

私たちの人生には喪失がつきもので、私たちの生は悲哀に満ちています。西田幾多郎という日本で最も有名な哲学者も、喪失や悲哀に身を置きながら、哲学しました。「我が子の死」という文章の一節を紹介します。

回顧すれば、余の十四歳の頃であった、余は幼時最も親しかった余の姉を失うたことがある、余はその時

二〇〇六年、静岡大学に着任する直前まで、私は東北大学大学院文学研究科の倫理学講座で助手をしておりました。

97 | 竹之内裕文「〈死〉とともに生きる」

生来始めて死別のいかに悲しきかを知った。余は亡姉を思うの情に堪えず、また母の悲哀を見るに忍びず、人無き処に到りて、思うままに泣いた。稚心（おさなごころ）にもし余が姉に代りて死に得るものならばと、心から思うたことを今も記憶している。

近くは三十七年の夏、悲惨なる旅順の戦に、ただ一人の弟は敵軍深く屍を委して、遺骨をも収め得ざりし有様、ここに再び旧時の悲哀を繰返して、断腸の思未だ全く消え失せないのに、また己が愛児の一人を失うようになった。骨肉の情いづれ疎なるはなけれども、特に親子の情は格別である、余はこの度生来未だかつて知らなかつた沈痛な経験を得たのである。

とにかく余は今度我子のはかなき死ということによりて、多大の教訓を得た。名利を思うて煩悶絶間なき心の上に、一杓の冷水を浴びせかけられたような心持がして、一種の涼味を感じると共に、心の奥より秋の日のような清く温かい光が照して、すべての人の上に純潔なる愛を感じることが出来た。

特に深く我心を動かしたのは、今まで愛らしく話したり、歌ったり、遊んだりしていた者が、忽ち消えて壺中の白骨となるというのは、如何なる訳であろうか。

もし人生はこれまでのものであるというならば、人生ほどつまらぬものはない、此処には深き意味がなくてはならぬ、人間の靈的生命はかくも無意義のものではない。死の問題を解決するというのが人生の一大事である、死の事実の前には生は泡沫の如くである、死の問題を解決し得て、始めて真に生の意義を悟ることができる。（『西田幾多郎全集 第一巻』、岩波書店）

とても悲痛な文章です。そしてここには、西田哲学のキーワード「矛盾」が顔を覗かせています。それが最後の論文「場所的論理と宗教的世界観」では、「生きる者は、死するものでなければなりません。それは実に矛盾である。しかしそこにわれわれの自己の存在があるのである」と明確に打ち出されています。さらに「場所の自己限定としての意識作用」という論文は、次の言葉で結ばれています。

哲学はわれわれの自己の自己矛盾の事実より始まるのである。哲学の動機は「驚き」ではなくして深い人生の悲哀でなければならぬ。（『西田幾多郎全集 第六巻』、岩波書店）

西洋哲学の土台を築いたアリストテレスは、『形而上学』という本の中で、哲学は驚くことから始まると言っています。私はこれをとても優れた定義だと思っていました。冒頭に述べたように、普通の人が「そんなの当たり前だ」と通り過ぎてしまうその場所に、「なんだこれは」と立ち止まり、驚きとともに問いを発してしまわなければなりません。これに対して西田は、「哲学の動機は『驚き』ではなくして深い人生の悲哀でなければならぬ」と主張します。これは深い洞察だと思えます。「驚き」にも質があるということではないでしょうか。「珍しい」「これは何だろう」と好奇心に駆られるときの驚きと、「なぜ生きている者が死ななければいけないのか」という悲痛な問い、自己そのものの基盤にかかわるため、なかなか解けず、深い思索を要求するような驚きを、区別したのだと思います。

＋死とともに生きることを読む

西田は人生の悲哀を身に負いながら、その悲哀が開披する事実に向きました。「生きる者が死するものでなければならぬ」という矛盾、死すべきものとして生きるという矛盾、その事実を受けとめつつ、その意味を探求しました。それは「死とともに生きる」ことの意味といってもよいで

しょう。ここには大別して、二つの意味があるように思います。

ひとつには、死から生を学ぶことです。自分自身の「究極の可能性」ないし「全面的な別れ」としての死を引き受け、大切な人との死別を経験することで、私たちは「死とともに生きる」という人間固有の課題を学び直していきまします。可能性としての「死 death」から、生きることを学ぶのです。

緩和ケアに携わる看護師たちはしばしば、「人間は最後の瞬間まで変わることができる、最後まで希望がある」と口にします。かりに今まで、死を遠ざけて生きてきたとしても、今、ここで、真剣に向かい合うならば、この瞬間が、この出会いがかけがえのないものとして立ち現れ、それによって生き方が変わるということです。死から生が学ばれるわけです。

もうひとつには、生から死を学ぶことです。より正確に言えば、「生きる living」ことを通して、「死にゆく dying」という課題を学ばなければなりません。今、ここで、自分なりに精一杯生きることを通して、初めて死んでいくことができるということになります。

緩和ケアの医師たちからは、「人は生きてきたようにしか

死んでいけない」という発言がよく聞かれます。つまり、これまでの人生において、何を大切にして、どのような選択をしてきたか、人生とはその積み重ねのことであり、あたかもそれがなかったかのように、最後になってすべてのカードをひっくり返すことはできないというわけです。あなたが死んでいくための足がかりは、あなたがこれまで生きてきた生のうちに、選択の積み重ねのうちにあります。ここでは、生から死を学ぶという課題が強調されているように思います。

これまで確認してきたように、死とは、生のあらゆる可能性を不可能にしてしまう「究極の可能性」と捉えることができます。ただしこれは事柄の半面にすぎません。これもすでに確認した通り、死ぬことができるのは生命体だけです。物質や人工物は、破損することはあっても死ぬことはできません。死は、「できる」という可能性でもあるのです。ギリシア神話に見られるように、古代ギリシアの世界では、人間は「死すべきもの」、つまり「死という定め mortality」にあるものと呼ばれていました。では「死すべきもの」ではないものは何かというと、それは「不死のもの」たち、すなわち神々です。「死」の可否によって人間と神の間に一線を画すとき、ギリシア人は、人間が人間である最終的な

根拠を「死」のうちに見出していたわけです。「不死」を手に入れるとき、人間は人間でなくなってしまうのです。

「死すべきもの」と言うとき、代謝活動の停滞とともに生命体が物質に還帰するという事態がまず思い浮かびます。生命あるものは、生まれ、育ち、やがて衰え、死んでいきます。生命あるものはすべて、死滅を免れないという意味で「死すべきもの」です。しかし、人間はこれに加えて自らが「死すべきもの」であるということ、いつか自分が死ぬという可能性について、何事かを知りながら生きています。その可能性をどのように受けとめるか、引き受けるかに応じて、人生は充実したり、豊かなものになったりするので。それが他の動物と決定的に異なる、人間に固有の可能性です。この二重の意味で人間は「死すべきもの」です。たとえ他の生命体、生物種とともに、いつか絶滅するとしても、二重の意味での「死すべきもの」として絶滅していくでしょう。

よく生きる

「いかに生きるか」は、その都度、いかなる選択をするかということの積み重ねです。それとまったく同様、「よく生きる」という課題は、いかに高尚で縁遠く響くにしても、

その都度「よいもの」、「よいこと」を選び取るという実践の集積にほかなりません。

死とともに生きる、あるいは死すべきものとして生きる
とき、人は「毎日をあたかもそれが最期であり、同時に長い生涯の最初の日であるかのように生き」、「今日のうちに現存するものをつかみ、どんな課題もつまらないものとして軽んじることなく、どんな時間も短すぎるものとして無視することもなく、できるかぎりの力をもつて働く」こととなります（キルケゴール「埋葬の機に」、『キルケゴール講話・遺稿集4』所収、新地書房）。「死」が与えられているからこそ、私たちは死にいく（Dying）歩みを少しでも「よいもの」にすること、つまり「よく生きる」ことを試みるのです。

「よく生きる」という営みのおもしろいところは、それが「個体、私なら私という個で完結しないことです。たとえば農山村という場所では、その土地に根ざして「よく生きる」という試みが世代を超えてずっと受け継がれてきました。まず誰かが集落を拓き、家屋を構えて、先人のためにお墓を築いて、畑を開墾して、その畑の改良を重ねてという営みが、世代を跨いで続けられてきました。死すべきものとして先立つ世代が遺した未完の課題を次の世代が受け継ぎ、

試行錯誤の中で何とか実現しようと試みてきました。そのようにして「よく生きる」という課題が次の世代に引き継がれてきたのです。

現代の都市生活では難しい面があるかもしれませんが、農山村の生活が世代継承してきた生の実践は、人が生きる基本型のようなものかもしれません。私の人生は一つの芸術作品のようなものだから、自分ひとりの力でなんとか完成させなければならぬ、死んでも死にきれないなどと力む必要はないのです。「よく生きる」という課題は次の世代に継承されていく。だとしたら、「よく生きる」という試みの全体としての成否も、未来世代の生にかかっているということになります。「いのち」という言葉を手がかりに、生の継承性について、もう少し考えてみることにしましょう。

四 「いのち」が抜く地平

† 「いのち」という言葉

近年の日本社会では「いのち」という語が好んで用いられます。この講座のタイトルとしても、数年前に使われていました。では、なぜ「いのち」という言葉を使うのか。「い

のち」という言葉でしか言い表せないものがあるのでしょうか。あるとしたら、それは何なのでしょうか。

西行の歌から見てとられたように、「いのち」という言葉には、生と生のつながり、生と死の響き合い、要するに「生きる」ことの全体性が刻印されています。ものを大切にするとという思いを込めて「もののいのち」と言われることを踏まえれば、「いのち」の広がり、無生物にまで及ぶと言えそうです。

もうひとつ、確認しておきたいのは、「いのち」という概念は、他なるものとのかかわり（関係、絆、つながり）を前提にするという点です。たしかに現代の私たちは、「私のいのち」と言います。しかしそれはあくまで派生的な用例であって、元々は、生きるという営みを通して、「私」がすでに他のもの（生物・無生物）と出会ってしまっている、その事態を指し示す言葉だったようです。そのような概念として、「いのち」は、個体の消滅としての「死」に対する不安を超える足がかりを与えてくれると考えられます。

「いのち」という言葉の語源については、いくつか説があります。代表的な見解は、「イノチ」の語源をイノウチ（息内）ないしキノチ（気内）に求めるものです。「いのち」は呼吸や大気に深く関係しているのです。興味深いことに、

古代ギリシア語の「プシケ (psyche)」という言葉——「魂」や「精神」を意味する——の原義も「息」です。同様に、サンスクリット語の「プラーナ (prana)」という言葉——「生命」を意味する——の原義も「息」です。仏教学者の中村元さんが指摘するように、洋の東西を問わず、人類は、自分たちが呼吸する空気が生命そのものであり、生命そのものの原理に相当するという認識を共有してきたのです（『生命』の倫理』春秋社）。

そう考えてみると、今こうして私たちが吸い込んでいる大気は、地球の誕生以来、無数の生き物が吐いたり、吸ったりしてきたものです。空間的にも、時間的にも、途方もない広がりの中で、私たちは同じ大気に与って生きています。以上から、「いのち」は万物を支え、万物を結び合わせる働きを担っているということが分かります。

＋マタギから「いのち」を学ぶ

私の研究室（生命環境倫理学研究室）では、毎年のように白神山地に出かけています。目屋マタギの工藤光治さん、弟子の小池幸雄さんたちとともに山を歩くためです。一緒に山を歩きながら、山菜やキノコの採り方を教わり、クマの話聞きます。マタギ小屋に戻ると、採ったばかりのキ

ノコ類や山菜を調理し、直火で焼いたヤマメと一緒に食べます。夕食後も、火を囲みながら、工藤さんの話に耳を傾けます。マタギの工藤光治さんに対して、私は「あなたはどうして生きてきたのですか？」と問いかけながら、接してきたわけです。

白神山地が世界遺産に指定されてから、工藤さんは、かつてのように山を自由に歩きまわり、猟をすることができなくなっていました。その代わりに、白神山地をパトロールする仕事を引き受けているのですが、ある日、パトロールの途中、山の見まわりをしていたところ、タヌキに襲われたアオゲラを見つけました。工藤さんが近寄ったら、タヌキは逃げていきました。そこでアオゲラを自分の背負子しょいこに乗せて、家に連れて帰って、手当てをしてあげました。工藤さんはその時の様子を、数年前の私の指導学生、天野郁美さんに次のように語ってくれました。

無駄ないのちはとることがないというのが……。助けるものは助ける、このいのち……。でもこのアオゲ

ラも、私に助けられたいのちというのが分かるようで、三日飛び回ってから山に帰ったら嬉しいです。お互い、いのちのつながりっちゅうのは、人に話しても理解し

てもらえないでしょう。動物に思いが伝わると思うと……すごいね。

こちらと同じく天野さんによる聞き書きの成果です。

一般の人たちはただバックされた肉を食べて、自分の手は血で汚れることはないけれども、何にもそういうのを知らずに食べる人と、直接いのちを頂いて解体して食べる人と、そのいのちに対する思いやりっていうのは、直接自分でいのちを奪う人の方がはるかに分かっているといますよ。たいへんなことだ、いのちをもらうっていうのは……。

ブナの森は様々ないのちを育んでくれる森だったので、森を壊さずにそれを大事にして、いのちそのものをずっと代々引き継いできたという。だから私にとつて白神とはいのちの源だと思っています。

「私のいのち」と言えないことは、ここからも明らかでしょう。「いのち」は、森の無数の生き物を生かして、つなげています。それは空間的にも、時間的にも言えることです。

前の世代を次の世代につなげているのです。

＋「いのち」を受け継ぐ私たち

生命体は、他の生命体から生命を奪うことにより、自らの生命をつないでいます。食には、「死」を介した「いのち」の受け継ぎが見られます。なにを、どのように、だれと食べるのか、その選択によって私たちは、自らの死生観を表明してしまっているのです。

「いのち」は、「生きる」という各個体の営みを通して受け継がれてきました。人間の場合、二種の「いのち」の受け継ぎが認められます。

そのひとつ、「生命」の継承という現象は、人間に限ったことではなく、ほとんど全ての生き物に見られる共通の営みです。生命に与ることによって、生命体は生命体として存在しています。私自身も、生命に与ることで、今、ここに生きています。生命そのものは、私の親から私に、私から私の子どもたちに受け継がれています。生物誕生以来の壮大な歴史に照らせば、私はほんの束の間、親から受け継いだ生命を預かって生きています。生命そのものの継承という点では、人間は他の生物とまったく同等です。

もうひとつ、おそらく人間に固有な課題として、「生き方」

(生活・人生)の継承があります。血を分けた子孫を残さずとも、次の世代に自分の生き方を伝えていくということができません。すべての人間は、生き方の継承という可能性に開かれているのです。

以上、二種の「いのち」の継承が教えてくれるように、私たちが「生きる」ということは、前の世代から受け継いだものを、次の世代に渡すということです。もちろん渡すときには、自分なりの色が付いていたり、ニュアンスが付随していたりするでしょうが、基本的には、預かったものを譲り渡すということをしているだけのように思えます。

今日、お話しした内容を文学的に味付け、まとめてくれると思われる詩で、講義を結びたいと思います。美しい言葉を胸に、ご帰宅いただければ幸いです。

世界はうつくしいと

うつくしいもの話しをしよう。

いつからだろう。ふと気がつくとき、

うつくしいということばを、ためらわず

口にするのを、誰もしなくなつた。

そしてわたしたちの会話は貧しくなつた。

うつくしいものをうつくしいと言おう。

風の匂いはうつくしいと。

溪谷の石を伝わってゆく流れはうつくしいと。

午後の草に落ちている雲の影はうつくしいと。

(中略)

あざやかな毎日こそ、わたしたちの価値だ。

うつくしいものをうつくしいと言おう。

幼い猫とあそぶ一刻はうつくしいと。

シュロの枝を燃やして、灰にして、撒く。

何一つ永遠なんてなく、いつか

すべて塵にかえるのだから、世界はうつくしいと。

(長田弘『世界はうつくしいと』みすず書房)

質疑応答

質問——今日はありがとうございました。私は看護師をしています。先ほど、看護師は「最後まで人間は変われる、最後まで希望がある」と言うとおっしゃいましたが、私もずっとそういうふうに思っています。

私は家で死にたいという方たちを、自分の微々たる力でどうかお手伝いしながら、それを支えていきたい、最後

まで生き抜いてもらいたいと考えて仕事に携わってきたのですが、この三年ぐらいで身内が、大切な人が亡くなつて、強く感じたのが、死を受け入れるのは、実はその人ではないのではないかとということです。私は、本当に大好きだった祖父母や母親が死んだということを、これだけ何百人と看取りをしている中で、受け入れられないでいます。受け入れられないことが苦痛であるかというところでもなくて、もう永遠に会えないのですが、どこかですつといるのではないかと思いたいからこそ、祖母の仏壇の前に今も行けないという状況が、自分にとってはとても心地良かったりしているところがあるのです。

また、母ががんで亡くなったのですが、「この人、死のうと思っていないな」と思ったのが、亡くなる一週間前に、私に向かって、「何か死にそう、ああ辛い、死にそう」と言ったときです。私からすると、やはりナースをしているので、「お母さん、死ぬんだよ」と心の中で思ったりしました。亡くなる二日前にも「何か死にたくないな」と言つて、それが最期の言葉だったのではないかと思えます。「ありがとう」という言葉を言うようにはなつたのですが、母は最後まで死のうと思つて死んでいったわけではないと思つています。

祖母も意識が一月ぐらい朦朧とした中で逝ったのですが、やはり最後まで死のうとは思っていないだろうなという感じでした。死ぬ前日、自分の大事な友人が見舞いに来たときに、点滴でほとんど目も開けられない状況だったのですが、とてもうれしそうに動く方の手を動かしていたので、やはり生きたいと思って終わるのだらうなと思いました。死とともに生きるというテーマはとても興味深くて、今日はよかったなと思いました。ありがとうございました。竹之内——今日のような話を、私は「人は死ぬぞ、死ぬぞ」という脅し、恐怖を煽る話にしたくないのです。講演の後、「死ぬということを前提に生きないといけないのですか」と尋ねられる方がおられるのですが、あるとき私は考えて、「どちらでもよいと思います」と答えました。ご質問の後半に関して言えば、死とともに「生きる」、死があるからこそ眼の前の出会いを愛おしむという点が重要で、その手前の「死」というところで凍り付いてしまっただけは意味がないということをお話したつもりです。

ご質問の前半については、私の場合、父との死別が原点になっています。私が十九歳のときに父が死んで、不幸な別れ方をしてしまったのですが、父の残した手紙などを読み、父と対話しながら——両方通行と言えるかは微妙です

が——もう一度、出会い直すという経験をしました。生きることを出会い、死ぬことを別れと捉えたうえで、今日は、死を「全面的な別れ」として理解しましたが、死んで別れるということも、全面的な別れとは言えないのかもしれないせん。

私たちは通常、眼の前に再び登場することで、その人が生きることを確認しますが、なかなか会えない人、五年に一回ぐらいいしか会わない人の生存は、そのよう仕方では確認できません。次回会うときまで、あの人は以前にこういうことを言っていた、あれはどういう意味だったのだろうかと思案しながら、再会までの時間を過ごすとき、かりに何の連絡もないまま、その人が死亡してしまっていたとしても、その人との対話は続きます。そう考えると、死者との対話は可能だし、それを通して死者と出会い直すこともあるのではないかと、お話を伺いながら考えました。